韓国人元BC級戦犯 学生は向き合った

不条理「日本人の問題」

法政大3年の学生たちが昨年、朝鮮半島出身の元BC級戦犯、李鶴来(イハンネ)さん(92)と出会った。死刑判決を受けながら減刑されて生き延び、今も、戦犯とされた「不条理」を問い続ける李さん。70歳も年上の男性から、知らなかった過去と現在に触れた若者たちが、ドキュメンタリーづくりに挑んだ。

法大生がドキュメンタリー

14日午後、JR飯田橋駅に隣接するビルでドキュメンタリー作品を見る会があった。タイトルは、「戦後補償に潜む不条理～韓国人元BC級戦犯の闘い」。李さんを支える人たち約20人が集まった。

法政大国際文化学部の鈴木靖教授のゼミに所属する学生8人が制作。学部内のゼミの研究発表テーマとして取り組み、李さんの半生をたどった。

戦中に捕虜監視

日本の植民地下の朝鮮に生まれ、戦争中は「死の鉄道」と言われた泰緬(たいめん)鉄道建設のための捕虜監視員になった李さん。戦後、連合国軍の裁判により捕虜虐待の罪で絞首刑の判決を受け、減刑。刑死した仲間たちの無念の思いを晴らしたいと今も運動を続ける――。

作品を見終えた李さんは「年の離れた若者たちに、自分の思いが受け継がれたように感じた」と語った。

発表のテーマを決めたのは昨年9月。その前月の新聞に李さんのことが大きく取り上げられていた。それまで全員がBC級戦犯という言葉を知らなかった。

「こんな人がいるのに知らなくていいのか」と、ゼミの打ち合わせで議論になった。資料を読み、関係者への取材を重ね、昨年11月半ばに李さんの自宅を訪ねた。李さんは心臓発作を起こして緊急手術を受けたばかり。それでも、1時間の予定を超え、3時間近く語り合った。

「亡くなった友人や刑死した友人の無念を晴らし、名誉回復したい」。映像を撮影した中戸川望さん(21)は、「仲間のため」と繰り返す李さんの言葉が胸に残った。「死刑になってもおかしくなかった李さんが今も、仲間のために運動しているというのは奇跡。会えてよかった」。島野友花(ゆか)さん(21)も「穏やかな語り口から、本当に仲間のために解決したいという強い意思が伝わってきた」。

李鶴来さんにインタビューする法政大の学生たち＝東京都西東京市

援護の対象外に

1952年、サンフランシスコ平和条約の発効とともに、李さんらは日本国籍を失った。軍人・軍属の援護立法の対象は日本人のみとされ、李さんらは外された。一方、条約発効後も「日本人」として服役を続け、釈放されたのは56年。

「都合のよい時は日本人で、都合が悪くなると外国人。私たちは何人にでもなる」と李さんは言う。

父が韓国人で、母が日本人の布施恩実(ウンシル)さん(20)は「李さんは日韓のはざまでどこからも守ってもらえなかった。私も自分のアイデンティティーについて、日本と韓国の間で悩むことがある」と自分を重ねた。

神奈川県鎌倉市に、李さんが「恩人」と慕う元医師、今井知文さんが眠る墓がある。巣鴨プリズンから出所後、孤立無援だった韓国人元戦犯を物心両面で支え続けた医師。墓の脇には李さんらが感謝を込めて建てた碑がある。撮影に訪れた皆川達也さん(20)は、「周りの声や評判など気にせず、李さんたちの立場に立ち、理解して行動した日本人がいたという事実に胸を打たれた」。

「早期の解決を」

ドキュメンタリーの学部内での発表は11月25日。インタビュー後、徹夜に近い作業を続け、完成したのは発表の10分前。「日本人はいつまで謝り続けるんだろうという気持ちが正直あったが、目を向けないといけないと気づかされた」。中山佳子さん(20)は言う。

最後のナレーションは議論の末、こうした。「イハンネさんはもうすぐ93歳を迎えます。ともに活動を続けてきた仲間も残り3人。あまり時間は残されていません。早期の解決が求められる問題に、私たち若者はどう向き合っていくべきなのでしょうか」

堀田真央さん(21)はいま、思う。「最初、戦争は教科書の中の出来事だとひとごとだったが、関わるにつれてそうではなくなった。これは日本人の問題なのではないでしょうか」

巣鴨プリズンにいた李さんたち朝鮮半島出身の元BC級戦犯が、生活保障や早期釈放などを求めて「同進会」を立ち上げ、今年で63年になる。（編集委員・豊秀一）

韓国人BC級戦犯問題

連合国軍の軍事裁判で朝鮮半島出身の元軍属らが「日本人」として裁かれながら援護の対象外とされた問題。台湾出身の元BC級戦犯やその遺族らも含めて、特別給付金を支給する超党派の議員立法が検討されている。BC級戦犯として起訴された5700人のうち朝鮮人は148人で、23人に死刑が執行された。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。